

フランス語の授業中にどんな文化を教えるべきか？ —マルセイユの場合—

Quelles cultures enseigner en classe de français ? — dans le cas de Marseille —

伊 川 徹
IKAWA Toru
Université d'Ashiya
ikawa@ashiya-u.ac.jp

フランス語に限らず、外国語学習の大前提として、対象言語を話す民族を理解し、許容する態度がなくてはならない。言語の学習者でなくとも、例えば外国の小説や映画が好きだという人びとは、無意識の中に対象国に憧れ、その国の人びとや文化に興味を抱いている筈だ。言語教育に携わる者は、まずこのことを学習者（学生・生徒）に認識させねばならない。相手を許さないのであれば、それは戦時中の情報機関員の如く、敵国語の機械的言語学習に陥ってしまう。何のために学び、話し、書くのかを理解させることが外国語学習の導入に欠くべからざる要件なのである。

過去にも繰り返し述べたことだが、日本の英語教育の失敗はこのことを学習者に一切悟らせることなく、機械的言語学習を強いた結果である。文化的背景を欠いたまま、言語教育を推進できている（と思い込んでいる）人びとの存在は理解に苦しむのだが・・・

幸いにも、第2外国語と称される外国語教育は、大学に於いて開始されたので、英語教育の轍を踏むことはなかった。しかし、数年前の中央教育審議会の大学分科会の答申にしたがって、文部科学省が大学で「使える知識」「使える外国語」教育をすべきだと提唱し始めた。とりわけ後者については、大学に第2外国語が開講された本来の目的（発想の転換を促すこと）や現状（1週間に精々2コマという時間的制約）についての確かな検証も是正も行わず、前・後期併せて30回の授業を履行させることが「使える教育」に最も効果的だと判断し、国公私立大学に、全開講科目について、これを達成すれば、補助金額にも配慮するであろうという条件付（もっと言うならば恫喝紛い）の指示を出したのである。

その結果、多くの大学では、学生諸君の学力を斟酌せず、学部や学科の意向に副って教科書が選定され、シラバスには実にきめ細かく毎回の授業内容が書き込まれ、担当教員に僅かな余談の時間すら与えぬような授業形態となってしまった。我々は殆ど中学・高等学校の授業並み（であれば、45～50分間の授業が年間130～180回近くあり、十分に余談も冗談も可能であるから、最早それ以下）

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

の語学教育を強いられているのだ。学生気質も往年とは様変わりし、筆者が教壇に立った頃（30～40年も以前）であれば、授業が脱線どころか脱線転覆しても、休講が多くても、内容が充実し、教員が誠実であれば（脱線したり、休講したりするだろうか？）、大学の授業とはそういうものだと笑って許してくれたが、昨今の学生諸君にとっては、履修した科目の授業が近隣のクラスと同じテキスト、同じ授業内容、同じ評価法でなければ、不公平なのであり、始業時間を守り、シラバス通りに授業を終える教員こそ良い先生なのである。先生だから思わず先制攻撃を加えたくなるような学内外の有様だ。

こういう苛酷な条件下で、「使えるフランス語」を教授しつつ、授業中にフランス文化を織り込むことなど可能であろうか？それでも、1週2コマの授業が2年間配当されている大学・短大では、授業を脱線させる余地を何とか工面できそうだが、1週1コマの授業が2年間或いは1年半配当されているに過ぎない場合は、相当無理な相談かも知れない。

*

予断と偏見に囚われず、余談の材料として Marseille を挙げてみよう。この単語は1年生の最初の授業にも -ail(l), -eil(l), -il(l) を [aj][ej][ij] と読む練習にしばしば登場するので、脱線導入の切欠としては好都合だ。

[marsej] と発音させながら、「la Méditerranée に面した la République française 最大の港湾都市だね。金盥（カナダライ：は完全に死語）と洗濯板（も死語）を用いて洗濯していた頃は大きな固形石鹼（も手洗い用としては生き残っているが、洗濯用は粉末から既に液体が主流とて、これも死語？）が使われたんだ。当時それをマルセル石鹼と呼んでいたけど、綴りが原因の読み違いだね。大きな塊を切り分けて量り売りされ、今日でも le savon de Marseille は名物だよ」と説明しても全員キョトン？であろう。更に続けて、「第2次世界大戦前はもとより、戦後も航空機が発達するまでは、神戸に Messagerie Maritime S.A. という船会社があって、フランスへ行く日本人はみんな神戸から Marseille を目指し、そこから陸路 Paris などに移動したんだ。そういう歴史があって、1961年に神戸市と姉妹都市提携 Jumelage de Marseille et de Kobé を締結しているんだ」と言えば、関西地方の学生が少し興味を示すかも知れない。

Marseille は面積 240.62 km²、人口 850,726（2010年度）、Paris に次ぐフランス第2位、都市圏人口では Lyon に次ぐ第3位の都市である。Provence-Alpes-Côte d'Azur 地域圏の首府で、Bouches-du-Rhône 県の県庁所在地、同県西部の Arles と東部の Aix-en-Provence と共に l'époque gréco-romaine 以来の古代都市だ。

紀元前600年頃、小アジア Ανατολία の西海岸の都市 Καρία と Αιολία の間にある Ιωνία（イオニア様式の建築で世界史の学習者には馴染み深い）の港町 Φώκαια に住んでいた古代ギリシア人が現在の Marseille を植民地とし、Μασσαλία と呼んでいた。この街が la cité phocéenne と別称されるのはこのためである。

紀元前125年、所謂 les Gaulois である les Ligures celtiques が Μασσαλία を攻

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

撃し、マッサリア人は共同支配者の Roma antiqua に援軍を求めた。同年 Quintus Fulvius Flaccus が、翌紀元前 124 年には Gaius Sextius Calvinus がローマ軍を率いて遠征し、les Gaulois の拠点要塞都市 Entremont を破壊した。Sextius は紀元前 122 年、廃墟となった要塞の丘の南斜面に新たなる進駐要塞 Aquae Sextiae を建設するのだが、これが後の Aix-en-Provence である。

Les Gaulois の王 Bituit を撃破した Gnaeus Domitius Ahenobarbus と Quintus Fabius Maximus Allobrogicu は、紀元前 121 年に Le Rhône と l'Isère の合流点で、les Gaulois の軍隊 18～20 万人の大半を戦死させ、遂に南仏の覇権を握った Roma antiqua こと Senatus Populusque Romanus は属州 provincia > Provence である Gallia Narbonensis を創設する。これ以降 Μασσαλία はラテン語で Massilia と呼ばれるようになり、それが更にガリア風に訛って、今日の如く Marseille となった。

紀元前 118 年には Domitius が植民都市 Narbo Martius を建設、これが現代の Narbonne である。それから 60 年後の紀元前 58 年に Gaius Julius Caesar (蛇足ながら、道真・藤原・菅原であり、Caesar : 菅原は字である) がこの地に遠征、自ら著した *C.(aius) Iulii Caesaris Commentarii Rerum Gestarum* (中世写本) > *Caesaris Commentarii de Bello Gallico* (la Renaissance 写本) に記しているように、若干 20 歳の若き鬪将 Vercingetorix 率いる les Gaulois の連合軍 3～6 万人と激戦を繰り返した。Noviodunum > Nevers, Vellaunodunum > Villon, Cenabum > Orléans をローマ軍 6 個師団 3 万人が攻め落とし、Gergoviae (Clermont-Ferrand 近郊?) pugna で敗退したものの、遂に Alesiae (Alise-Sainte-Reine 村?) pugna で勝利する。降伏し、捕らえられた Vercingetorix は 6 年後に Julius の凱旋式のあった Roma で処刑される。こうして、紀元前 52 年までに la Gaule cisalpine から la Gaule transalpine に至る la Gaule 全土がローマ化され、勝者の la langue latine の強要によって la langue gauloise は le latin vulgaire > le latin classique > l'ancien français へと変貌を遂げ、le français moderne に幾つかの単語を残して、ほぼ完全に消滅した。

ここで大事なことは、歴史に「もしも」はないのだが、もしも紀元前 125 年にマッサリア人がローマに援軍を求めなければ、僅か 4 年後に南仏が属州 provincia > Provence とはならず、後の Julius の侵攻によるガリアのローマ化などなかったであろう。この意味で、Μασσαλία > Massilia > Marseille の歴史的変遷はフランスの言語と文化に途方もなく重要且つ大きな影響を及ぼしたのは確かである。しかし、フランス本国でも、我が国でも、このことにさほど関心がないのは何故だろう？本国にあっては、屈辱の歴史など大きく取り上げたり、強調したりしたくないのかも知れないし、政府がフランスの成立を Charlemagne, Charles I^{er} le Grand の即位以降としており、フランスの有史以前のことだという見解なのかも知れない。

*

3 世紀頃には、この地にもキリスト教が布教され、ローマ化が更に進み、10 世紀には Comte de Provence 領となり、1481 年に le Royaume de France に併合されたが、中世にはあまり顧みられることがなかった。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

さて、キリスト教の布教と言えば、1615年に Provence の Saint-Tropez に実に180名という大勢の日本人が上陸した。慶長18（1613）年1月に、伊達政宗の命を受けた支倉六右衛門長経（常長は子孫による後世の改名？）が慶長遣欧使節として石巻を出発、太平洋を越え、メキシコ南部を陸路横断、大西洋を越えて慶長20（1615）年1月にスペインに到達し、国王 Felipe III に謁見、元和元（1615）年9月 Roma で教皇 Paulus V に拝謁した話はよく知られているが、スペインから陸路と海路を併用してイタリアに向かう途中、船が嵐を避けて Saint-Tropez に寄港、そこで一行が鼻をかんだ懐紙を路上に捨て、現地の子供たちが拾い上げる様子がフランス側の記録に残っている。つまり、文献上初めてフランスを訪れた日本人は支倉使節団である。

一方、同じように初めて日本国を訪れたフランス人は François Caron である。彼は1600年、当時オランダ領であった Bruxelles で亡命 Huguenot 派の一家に生まれたが、オランダ国籍を得て、1619年に平戸オランダ商館の料理人として着任、滞在中の20年間に、日本語に精通し、江戸幕府の通訳に召し出されるなどして昇進、商館助手>次席>商館長代理を経て、遂に出島オランダ商館長（1639～1641）に就任する。この間に、江口十左衛門の姉と結婚、6人の子沢山となり、1641年に妻子と共に離日、1664年に la Compagnie française des Indes Orientales の directeur général を命ぜられ、フランス国籍を得る。

それでは、初めて来朝したオランダ人ではないか？と異議申し立てがあるかも知れない。仮にそうだとすれば、初来日のフランス人は、禁教令下の1636年に潜入したドミニコ修道会の宣教師 Guillaume Courtet ということになる。彼は秘密裏に布教活動を行った罪によって長崎で捕らえられ、1年間の牢獄生活中に手足の指と爪の間に金串を刺し通すなどの凄まじい拷問を受けた末、薩摩に移送され、1639年9月29日に他の宣教師と共に鹿児島で斬首刑となった。しかし、初めて渡仏した日本人が命を救われ、初めて来日したフランス人が惨殺されたのでは何とも寝覚めが悪い。ここは前者の François Caronこそ最初のフランス人来訪者だということにしておこう。

*

Marseille では18世紀に再度良港を用いた交易が盛んになったが、1720年に大規模なペストの流行によって10万人の死者を出すという大惨事があった。その70年後の1789年7月14日にはフランスのみならず、全ヨーロッパを震撼させる大事件 la Révolution française が勃発する。そして、この街の名を歴史に留める出来事が起こる。

革命政府がオーストリアに宣戦布告したという知らせが1792年4月25日から26日にかけて Strasbourg に届き、折柄駐屯中の工兵隊大尉 Claude Joseph Rouget de Lisle が市長の Philippe-Frédéric de Dietrich 男爵の要請を受け、出征部隊を鼓舞すべく一夜にして作詞作曲したと言われるのが *Chant de guerre pour l'armée de Rhin* である。大尉はこれをライン方面軍司令官で元帥の Nicolas Luckner 男爵に献呈したが、評判が良く、大量印刷され、全国に流布することになった。1789年8月10日に Sans-culotte 一派と一部の軍部隊による la Prise

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

des Tuileries が起こり、Louis XVI とその後 Marie-Antoinette ら国王一家は逮捕され、la Tour du Temple に幽閉されてしまう。この2週間前に Marseille を進発した義勇兵が Paris に到着、*Chant de guerre pour l'armée de Rhin* を口ずさみながら入城したので、たちまち市民の間で大流行した。その結果、Marseille の人びとが唱っていたからとタイトルは *la Marseillaise* と変更され、そのまま定着し、1795年7月14日に一院制の立法府 la Convention nationale で l'hymne national として採用された。

*

Marseille は Provence 地域と共に 2013 年度の la capitale européenne de la culture に選ばれ、1年間に亘り集中的に各種の文化行事が推進され、フランスでは目下脚光を浴びている。しかし、la Révolution française と Napoléon I^{er} による度重なる戦乱によって街は疲弊し、19世紀半ばから港湾施設が西に向かって拡張され、産業都市・商工業都市へと脱皮したにも関わらず、第2次世界大戦中はナチス・ドイツ軍に占領され、解放を目指す米・英連合軍との間で激戦と空襲が繰り返された結果、歴史的建造物の大半が破壊されるなど市街地は甚大な被害を被った。そういう訳で、1970年代に港湾・産業（鉄鋼・化学・プラスチック・金属・造船・建築資材・食品加工）・石油精製基地を複合的に配置した Fos-sur-Mer の開発が奏功、南仏に於ける貿易・商業・工業の一大中心地となったものの、南仏には珍しく観光的魅力に乏しい。

食前酒 pastis を飲み、bouillabaisse に舌鼓を打ちながら、市民が la bonne mère と呼ぶ黄金のマリア母子像を尖塔に頂く Basilique de la Notre-Dame de la Garde とその丘陵からの眺めや Calanque と呼ばれる奇岩の入り江、Alexandre Dumas, père 作の *Le Comte de Monte-Cristo* に登場する港外の流刑島 le Château d'If ぐらいが観るべきものと言え、大方のご叱正を喰らうであろうか？しかし、TAXI シリーズを初め、しばしば映画のロケーション地として採用されるのは、市街にこれと言った特徴が少なく、監督や制作者が不特定の背景が映り込むことを期待するからだと言え、二重のお叱りを受けるだろうか？ともあれ、中心街を歩いてみると、イタリア・スペインはもとより、Maghreb（アルジェリア・チュニジア・モロッコ）など北アフリカ出身の移民やその子孫と思しき人びとが多く、南仏特有の活気に満ちた雰囲気を持つ港町である。ちょっとお澄ました神戸市とではなく、大阪市との姉妹都市なら領けると言え、大方がご賛同くださるかも知れない。

フランスにとって幾つかの欠くべからざる歴史的・文化的接点を有する Marseille は何故か本国でも、同じ県内の Arles や Aix-en-Provence に比べて、引用される度合いが低い。第2次世界大戦で連合軍の猛爆撃が繰り返され、市街地が灰燼に帰した Bretagne の Brest や Normandie の Caen や Rouen と比較しても、Brest の如く全土を近代的設計に基づいて再構築した街に魅力が乏しく、飽くまでも過去の再現に拘った後者の方がフランス人に支持されるのは優れてヨーロッパ的発想なのである。上述の総てを授業中の余談として採用することはできないが、綴りを板書しつつ、是非 DVD などの映像を交えて、ご挿話賜りたい。